広島工業大学紀要研究編
第43巻（2009）pp.425-434
翻　　訳

『白鳥の騎士ヘリアス』— 粗筋と解題

酒　見　紀　成*

（平成20年10月3日受理）

1．あらすじ

かつてリルフォルトという豊かな強国に気高い王がいました。王の名はピエロンと言いました。彼は敵対していたもう一つの国の王女マタブルンと政略結婚をしましたが，この王妃は後に数々の不幸をもたらします。それは愛に拠らない結婚に対する神様のご意思なのかもしれません。やがて二人の間にオリアントという賢い王子が生まれました。王子は父王の死後，王国を受け継ぐと，王として国をうまく治めました。

ある日，オリアント王は森へ狩りに行き，一頭の牡鹿を追って駆けている時,家来たちからはぐれてしまいました。鹿にも逃げられ,彼はきれいな泉の近くで一休みしました。そこへとても上品な乙女が供の者たちを従えてやって来ました。

「あの鹿，逃がしておやりになったのですね。ですが，ここは私の土地でございます。誰がここで狩りをする許可を与えたのでしょうか」

ベアトリスという名のその乙女は言いました。オリアント王は彼女の堂々とした態度に感心し,正体を明かした後,彼女に求婚しました。彼女は身分が違いすぎますと言いつつも，ご命令であればと了承しました。

樹木が芽吹き，鳥たちが小枝でさえずる五月，高貴なベアトリスはリルフォルトへやって来ました。人々は大喜びしましたが,マタブルンだけは浮かない顔をしていました。

「どこかの姫を妻にするべきでした。そうすれば彼女の領地をも相続できるのに」と言う母に，オリアント王は「彼女に優る女性はいません。母上も喜んでください」と言いました。そして翌日，教会で盛大な結婚式を執り行いました。が，マタブルンは絶えず心の中で悪態をつき，ベアトリスに対し陰謀をめぐらしました。

厳かな結婚式から間もなく，彼女は妊娠しました。人々はみな喜びました。その頃，国境付近で小競り合いが起きましたが，オリアント王は妻を気にかけ，半年間動きませんでした。しかし，敵兵が領国に侵入するや，騎士たちを集め，指揮をとることにしました。

「身重の妻をくれぐれも頼みます」という王に，マタブルンは

「私の娘と思って大事にしますから，心配いりません」と受け合いました。

王と騎士たちは戦地で数々の手柄をあげました。一方，マタブルンにとっては絶好のチャンスです。彼女は産婆を呼びにやり，

「私の秘密の計画に協力すれば，金銀をあげましょう」と持ちかけます。

「分かりました。それでしたら，お腹の中の子を殺して死産ということにされては」と産婆。

「いや，もっといい方法がある。王妃のお腹は異常に大きいので，双子か三つ子であろう。王妃が出産したら，赤ん坊たちを密かに私の許に抱えて来なさい。そして生まれたばかりの子犬とすり替えよう」（1-5章）

王妃の陣痛が始まると，あの産婆が呼ばれました。産婆は何食わぬ顔で王妃にお産の説明をしたり励ましたりします。マタブルンも呼ばれました。王妃は急に激しい痛みに襲われ,苦しみながら六人の息子と一人の娘を産みました。ところが，どの子供も首に銀の鎖をかけていました。神様の恩寵のしるしかも知れません。しかし，マタブルンはそれには構わず，こっそり子供たちを運び出させ，代わりに七匹の子犬を王妃のそばに置きました。そして大声で

「お妃よ，貴女は子犬をお産みになりましたぞ」と言いました。

意識が朦朧としていた王妃は,簡単に義母の姦計に陥り,嘆き悲しみました。

「このことが王に知れたら，私は死刑に処せられるでしょう。できることなら，修道女になって罪を償いたいものです」

マタブルンはマークスという従者に命じて言いました。

* 広島工業大学工学部電子情報工学科

「この七人の赤ん坊は首に鎖をつけて生まれてきたので，まともな人間には育つまい。今すぐ川で溺れさせよ。もちろんこのことは口外無用です」

マークスはリルフォルトから10マイルのところにある森まで来た時，神に霊感を与えられ，馬から降りました。そして子供たちを外套の上に置いて見ているうちに，あまりに可愛いので，不憫に思い，「お前たちを神様がお守りくださるように」と言って，その場に置いて帰りました。

町に帰ると，マタブルンが彼に尋ねました。

「私の命じた通りにやったかい？」

「はい，奥様。子供たちの手足を切って川に投げ捨てました」

一方，森の中で子供たちは飢えのために泣いていました。そこへ一人の敬虔な隠者が通りかかりました。ヘリアスという名です。彼は子供たちに気づくと，彼らを優しく外套に包み，自分の小屋まで連れ帰りました。そして子供たちの体を温め，貧しいながらも精いっぱい育てました。

隠者は食料不足のため子供たちが死ぬのではないかと思いました。そして神に祈りました。「パン五つと魚二ひきで五千人のお腹を満たされたように，どうかこの七人に食物をお与えください」

すると，驚くべきことに，隠者の小屋に一頭の白い山羊がやって来て，子供たちに乳をたっぷり与えました。

神の恵みと，貧者への施しのパンのお蔭で，子供たちはすくすくと育ちました。その頃，オリアント王が戦争に勝って帰国しました。早速，マタブルンは戦勝を祝した後，ベアトリスが犬の子供を産んだことを知らせ，彼女を火刑に処するべきだと言いました。産婆もその嘘に加担します。王は悩み，苦しみます。

「誰よりも愛していた私をなぜ彼女は裏切ったのだ？ ああ，全能の神よ，私はどうすればいいのですか」

別の部屋にいるベアトリスの許に従者が来て，王が帰国されたこと，マタブルンが一切のことを王の耳に入れたことを告げました。王妃は聖母とイエス・キリストに祈りました。（6 -10 章）

オリアント王は会議を招集し，王妃の問題について相談しました。司教が死刑に反対して言いました。「王妃の就寝中，何かの動物が彼女に暴行したのかも知れません。然るべき場所に軟禁されるのがいいでしょう」

王はホッとしました。ところが，勇猛な騎士が言いました。

「それでは王はいつまでも再婚できず，後継者もお出来になりません。彼女を火刑に処し，もっと立派な女性と再婚なさるべきです」

すると，王は「妃が本当に死刑に値するのであれば，彼女の生死に拘らず，私は決して再婚しないと神に誓ったのだ」と言い，王妃を軟禁するよう二人の騎士に命じました。

一方，敬虔な隠者ヘリアスと，神から遣わされた白い山羊のお蔭で，七人の子供たちは成長しました。ヘリアスは子供たちが神に受け入れられるよう，彼らに洗礼を受けさせました。七人の中にとりわけ美しい男の子がいました。隠者はその子に自分の名と同じくヘリアスと名づけました。子供たちはいつも一緒に森の中で木や花に囲まれ，楽しそうに遊び回っていました。

ある日，サヴァリというマタブルンの騎士が隠者の住む森へ狩りに行きました。そして銀の鎖をつけた七つ子が木の下でりんごを食べているのを見かけました。彼は子供たちの後を追って隠者の小屋まで行き，隠者から子供たちのことを詳しく聞きました。そしてリルフォルトに戻ると，マタブルンに報告しました。彼女はひどく驚きましたが，ベアトリスとオリアント王の子供たちに違いないと思いました。そこでサヴァリに彼らを殺すように命じました。一方，命令を実行しなかったマークスはマタブルンによって両目をつぶされました。

サヴァリは力強い仲間を七人連れて森へ向かいました。途中で，自分の子供を殺した母親が火あぶりの刑に処せられる場面に出くわして怖くなり，仲間たちに言いました。

「あの子供たちは首に綺麗な銀の鎖を持っている。彼らに危害を加えたら，神様に呪われるかも知れない。だから，彼らから鎖だけを奪い，それをマタブルンの許へ持って行き，彼らは死んだと信じこませよう」

その時，隠者がヘリアスを連れて物乞いに出かけていたので，小屋には六人しかいませんでした。サヴァリたちは子供たちの首から鎖を取りましたが，その時，子供たちはたちまち純白の白鳥に変身し，悲しい鳴き声をあげながら飛んで行きました。サヴァリたちは腰を抜かすほど驚き，そのような役目を負わせたマタブルンを恨みましたが，六つの鎖を彼女に届け，子供たちは殺したと言いました。しかし，一つは途中で失くしました，と。そしてマタブルンは六つの銀の鎖でカップを二個作るよう命じました。金細工師が一つの鎖を溶かすと，六つの鎖を溶かした以上の量になったので，残りの五つは妻に与えました。

隠者とヘリアスが小屋に戻ると，六人の子供たちがいません。彼らは暗くなるまで森の中を捜しましたが，見つからないので，一晩中嘆き悲しみました。翌日もヘリアスは泣きながら捜しました。とある湖のそばに来た時，六羽の白鳥が泳いでいるのが見えました。彼が近づくと，白鳥たちも嬉しそうに寄って来ます。彼はパンを与えました。そ

れから毎日，湖へ行っては白鳥に自分のパンを与えました。（11 -15 章）

王妃を亡き者にする方法を探していたマタブルンは，マケイルという悪い騎士を買収し，王妃は王とその母親を毒殺しようとしていたと偽証させました。マケイルは決闘も辞さないと言ったので，さすがの王も，ベアトリスのために闘ってくれる者が現れなければ，王妃を死罪にすると誓いました。そのことを従者から聞いた王妃は神に祈りました。

神はベアトリスの祈りを聞き届けられ，天使を隠者の許に遣わされました。天使は七人の子供たちがオリアント王の七つ子であること，邪悪なマタブルンが王妃に犬の子供を産んだと信じ込ませたこと，名付け子のヘリアスが毎日パンを与えている六羽の白鳥は，銀の鎖を奪われた子供たちの変身した姿であること，王妃が不当に告発されてもうすぐ死刑になることなどを教え，名付け子を決闘の場に送るべきだと言いました。さらに，ヘリアスはマケイルに勝利し，その孫はブイヨンのゴドフロワと呼ばれ，エルサレムを開放するであろうと言いました。隠者が天使から聞いたことをヘリアスに告げると，ヘリアスは白鳥の世話を隠者に頼み，杖を手にして裸足でリルフォルトへ向かいました。彼は十六歳の逞しい若者に成長していました。

やがてオリアント王が王妃に死罪を申し渡す日が来ました。王妃が牢から連れ出されると，王も廷臣たちもみな同情しました。そして王の宮廷で死刑が言い渡されようとした時，杖を持ったヘリアスが現れました。がさつな門番が尋ねました。

「何用か」

「マケイルに用がある」

「私がそうだ」

と門番は彼をからかって答えたので，ヘリアスは門番を殴り倒しました。すると衛兵が飛んできて彼を捕えましたが，

「私の母を陥れたマケイルに復讐するまでは帰らないぞ」

と彼が言うのを別の衛兵が聞き，彼を会議室へ案内しました。そしてヘリアスはマケイルをこぶしで打ちのめしました。居合わせた騎士たちはそれを見て喜びました。マケイルの告発を快く思っていなかったのです。しかし，王は言いました。

「私の前でこのような乱暴を働くとは何事だ」

「この事件の真相を告げるために来ました」

とヘリアスは言い，自分がオリアント王とベアトリス王妃の間にできた七つ子の一人であること，自分たちがマタブルンに二度も殺されかけたこと，銀の鎖を奪われ他の兄弟たちが白鳥に変身したこと，隠者に天使が現れたことなどすべてを話しました。王はとても驚きました。そして王妃に尋ねました。

「この若者の言うことをどう思うか」

「神様がこの子を私のために寄越されたのです。どうか貴方の息子として遇してください」と王妃は言いました。

王は王妃を心地よい部屋に移しました。そしてヘリアスの言ったことを母親のマタブルンに質しましたが，母親は否認しました。そこでヘリアスのために相応しい甲冑を作るよう命じた後，隠者に会いに行きました。息子の話の真偽を確かめるためです。隠者はヘリアスと同じことを言いました。その時，王は王妃の無実を悟りました。王は子供たちを育ててくれたお礼に多額の金銀を隠者に与えました。そしてヘリアスとマケイルの決闘の日時を決めるため，リルフォルトに戻りました。

町に着くと，王は直ちにマタブルンを捕え，投獄しました。それからマケイルを呼びに遣りました。一方，ヘリアスは二人の騎士から王子に相応しい鎧と兜をつけてもらうと，鎧をつけた馬にまたがり，楯を手にし，槍を構えました。マケイルもしぶしぶ決闘に応じることを誓わされました。（16 -20 章）

大勢の人々がその決闘を見に来ました。善良な王妃の潔白が明らかにされることを望んでいたのです。二人は激突し，ヘリアスはマケイルを馬もろ共倒しました。しかし，二度目の激突ではヘリアスが傷を負い，血が流れました。それを見て，ベアトリスは神に祈りました。三度目の激突の際，ヘリアスはマケイルの兜を飛ばし，次に剣を抜いて彼の片腕を斬り落としました。マケイルは降参して言いました。

「私の負けだ。教えてくれ，そなたは何者だ」

「私はオリアント王とベアトリス王妃の息子だ」

「どうかご慈悲を。本当のことを言いますから。私は王妃の件では偽証しました。貴方の兄弟たちが白鳥になったというのも本当です」

ヘリアスは彼にすべてを白状させるため，処刑を延期しました。

オリアント王はマケイルに言いました。

「そちは勝者に慈悲を乞うのだな」

「はい」

「他に言うことはないか」

「やはり悪いことはできません。王妃が立派なお子さんを七人お産みになったのは本当です。マタブルンがそれを犬の子とすり替え，マークスという部下に命じてお子たちを殺そうとしましたが，彼はそれを実行しませんでした。そ

れで目をつぶされました。また，マタブルンは奪った銀の鎖でカップを作らせました。王妃が王とその母親を毒殺しようとしたというのも偽りです。どうかお赦しください」

それを聞いて王はベアトリスに謝罪しました。そしてマケイルを反逆罪で絞首刑にしました。

ヘリアスは宮殿の広間で騎士たちに甲冑を脱いでもらいました。誰もが王の息子の勝利を喜び，楽器に合わせて踊ったり，歌ったりしました。聖職者や市民たちも来ました。翌日は教会で行列して唱える祈りに大勢の人々が加わり，その後，司教がミサを捧げました。その間に，カップを作った鍛冶屋が呼びに遣られました。彼は直ちに五つの鎖とカップを一つ持って来ました。

「何か悪いことをしましたでしょうか」と鍛冶屋は尋ねました。

「五つの鎖を持っていたのは悪いが，赦そう」と王は言いました。そして王と王妃はその鎖に泣きながら口付けしました。それから盲目のマークスが呼ばれました。

「そうなったのは誰のせいだ」

「王様の母上です。私が子供たちを殺さなかったからです」

王は彼にたいそう同情し，神よ，彼に視力をお与えくださいと祈り，目の前で十字を切りました。すると，マークスの目が以前のように見えるようになりました。居合わせた廷臣たちはみな驚きました。

決闘が行われた日，投獄されていたマタブルンは看守に酒を飲ませ，眠らせました。そして牢屋から抜け出すと，自分の城に篭城しました。一方，ヘリアスは王から兄弟たちの銀の鎖を返してもらいました。その時，宮殿の傍を流れる川に白鳥たちが現れました。ヘリアスは王と王妃に言いました。

「あれが五人の兄弟と一人の妹です」

ヘリアスが白鳥に近づくと，彼らは羽をばたばたさせて喜びました。ヘリアスは五羽の白鳥の首に鎖を掛けました。すると，たちまち人間の姿に戻りました。王と王妃は四人の息子と一人の娘に駆け寄り，口付けしました。人々はその奇跡に驚きました。残る一羽は悲しそうに川へ飛んで戻りました。そして悲しみのあまり自分の羽を全部引き抜きました。ヘリアスは白鳥の弟に，もうしばらく辛抱してくれと言いました。それから五人の子供たちは教会で洗礼を受け，娘はローズと命名されました。

王はヘリアスが神に愛されているのを知り，貴族や騎士たちを集めて言いました。

「私は退位し，王国を息子に譲るつもりだ。それを示すため王冠を彼の頭にかぶせよう」そしてマタブルンの逮捕をヘリアスに委ねました。早速，ヘリアスは六千を超える軍勢を率いてリルフォルトを出ました。そしてマタブルンの城を包囲しました。彼女は塔に立て籠もり，息子のオリアント王に会わせろと言いました。が，ヘリアスは入口を壊して入り，マタブルンを捕えました。そして火あぶりの柱や薪が用意された外庭まで連れて行き，その柱に縛りつけました。彼女は観念して言いました。

「確かに私は殺されて当然のことをした」

かくしてマタブルンは大勢の目の前で火刑に処せられたのです。(21- 25 章)

ヘリアス王はリルフォルトを平和的に正しく治めました。ある日，彼が宮殿から川を見ていると，一羽の白鳥が河岸まで小船を先導して来るのに気づきました。それは彼の兄弟の白鳥でした。その時，ヘリアスはその白鳥に導かれて行くのが神のご意思だと悟り，両親や兄弟たちに言いました。

「兄弟の白鳥が私を連れに来ましたので，私は外国へ行かねばなりません。だから，父上，王国と王冠はお返しします」

両親と兄弟たちは見ていられないほど悲しみました。

彼が別れを告げると，鎧や円盾や，表に二重の十字が金色で描かれた銀製の盾などの武器が船に積み込まれました。オリアント王は彼に角笛を与えて言いました。

「これを高らかに吹けば，怪我をしないで済むだろう。そなたの無事の帰還を祈っているぞ」

その時，白鳥が兄を呼ぶかのように，三，四回大きな声で鳴きました。ヘリアスたちが急いで河岸へ行くと，白鳥は羽ばたきをして喜びました。国王夫妻と子供たちは白鳥の姿をした身内を見てひどく悲しみました。それからヘリアスは白鳥が案内する船に乗り込みました。そして川から川をめぐり，ついにヘリアスの妻となるべき女性のいる国へたどり着きました。

その頃，アーデンとリエージュとナムールの三国を領するドイツ皇帝オットーは首都のノイマーゲンで裁判を開きました。訴訟の一つはフランクフルト伯がブイヨン公爵夫人の領地を不当に奪おうとして訴えたものでした。伯爵はブイヨン公爵の兄弟であり，公爵はもう三年も外国へ行ったまま帰らないので，その間に生まれた娘は嫡出子ではない，従って父から受け継いだ領地を自分に返すべきだと言い，自分の主張が正しいことを証明するため決闘を申し入れました。それで皇帝は公爵夫人に，代わりに闘ってくれる者を捜す猶予を与えました。しかし，誰も進み出ません。公爵夫人は神に助けを求めて祈りを捧げました。

白鳥がヘリアスを連れて来たのはこの町でした。彼は町

に近づくと角笛を吹き鳴らしました。その音に驚き，宮廷にいた人々は窓から外を見ました。白鳥が曳く小船に武装した騎士が乗っています。王はヘリアスを呼びにやりました。ブイヨン公爵夫人クラリッサは娘に昨夜の夢の話をし，自分は夢の中で火あぶりの刑を宣告されたが，白鳥が飛来し，火に水をかけてくれました，だからあの騎士が私を助けてくれるでしょうと言いました。皇帝はヘリアスにどうしてここへ来たのかと尋ねました。

「私は冒険を求めて旅をしています」

「それなら公爵夫人に代わって闘ってくれるか？ そなたが勝てば，公爵領を再び夫人に安堵しよう，そしてそなたは公爵夫人の綺麗な娘と結婚するがよい」

と皇帝は言いました。ヘリアスは公爵夫人に無実か否か確認しました。そしてヘリアスは皇帝に言いました。

「このご夫人を不当に訴えた男をここに連れて来てください」

フランクフルト伯は白鳥の騎士の手袋を拾いました。直ちに対戦場が整えられ，騎士たちは槍と剣と盾で武装しました。そして大勢が見守るなか，馬に跨った二人は激しく激突し，槍が粉々に折れました。次に，剣を抜き，長いこと打ち合いました。ついに伯爵の動きが鈍くなりました。しかし，ヘリアスは公爵夫人のためにも負けられません。伯爵が休止を要求して言いました。

「もし私に勝たせてくれたら，私の娘と領地をやろう」

「私を仲間だと思っているのか。信義にそむくくらいなら八つ裂きにされたほうがましだ」

と言うと，ヘリアスは思い切り斬りつけ，伯爵の兜を粉砕しました。さらに，反撃してきた伯爵の剣を飛ばすと，馬から降り，彼の盾をひったくりました。そして彼の首を斬り落としました。（26-30 章）

決闘に勝ったヘリアスは恭しく皇帝に挨拶した後，公爵夫人の娘に結婚を申し込みます。もちろん彼女は承諾しました。公爵夫人は跡継ぎができたので，自分は尼僧になると言いました。皇帝はヘリアスがクラリッサの娘と結婚し，ブイヨン公爵となることを宣言し，その日は一晩中，騎士や郷紳たち，貴婦人や乙女たちは喜び合い，楽しみました。翌日，教会で結婚式が厳かに行われ，その後，宮殿で盛大な祝賀会が催されました。その夜，ヘリアスは新婦と床を共にしましたが，その時彼女は娘を懐妊しました。半月に及ぶ祝宴が終わると，ブイヨン公爵ヘリアスとその妻は皇帝に別れを告げ，領国へ向けて旅立ちました。途中，フランクフルト伯の一味が攻撃を仕掛けてきましたが，ヘリアスはこれを難なく退けました。そして意気揚々とブイヨンの町へ入り，人々から歓迎されました。それから九ヶ月後，夫人は綺麗な娘を出産し，その子はイダインという洗礼名を与えられました。ある日，夫人は夫のヘリアスに尋ねました。

「貴方はどの国の方ですか，どんなお友達をお持ちですか」

すると，夫は何も答えず，もし再びそのことを尋ねたら，自分はこの国から出て行くと警告しました。

それから二人は七年間仲睦まじく暮らしました。ところが，ある夜，夫人は思い切ってヘリアスの素性を尋ねました。すると彼は怒って言いました。

「それは教えられぬ。私は明朝この国を去り，ブイヨンには二度と戻らぬ」

夫人はさめざめと泣き，寝台を出て，ヘリアスの愛するイダインにそのことを告げました。娘は父に言いました。

「私たちを見捨てるのですか。私を孤児にするのですか」

しかし，ヘリアスの決意は変わりません。翌朝，彼はいつものようにミサを聞いた後，家臣たちに言いました。

「このブイヨンの国と私の妻と娘をくれぐれも宜しく頼む。この地を離れる時が来たのだ。もうすぐ白鳥がやって来て私をノイマーゲンへ案内するだろう」

その時，あの白鳥が大きな鳴き声をあげて兄弟を呼びました。ヘリアスが小船に乗ると，人々は国を平和に治めた公爵のような領主はいないだろうと思い，悲しみました。

公爵夫人と娘のイダインはすぐさま皇帝に会いにノイマーゲンへ出かけました。そして皇帝に言いました。

「私は今日，夫を失うかも知れません」

「如何したのだ？ 彼を怒らせるようなことをしたのか」

そこで公爵夫人は夫の警告に違反し，咎められたことを話しました。その時，角笛の音が響きました。

「あれは夫が陛下に暇乞いに参ったのでございます。陛下にお止め頂かなければ，夫は二度と帰って来ないでしょう」

「よく来られた」皇帝はヘリアスに言いました。

「陛下」ヘリアスは言いました。「私は神のご意思により故国へ帰らねばなりません。それ故，妻をよろしくお願い致します。また，私の娘を陛下の養子にして頂きとう存じます」

「しかし，何か間違いがあったにせよ，これほど早く妻の許を去るのは神に背くことではないか」

「陛下，それが神のご命令なのです」

「それなら私も反対はせぬ。イダインには然るべき相手を見つけてやろう」

かくしてヘリアスは白鳥の姿をした兄弟の待つ川へと向かいました。

白鳥はヘリアスをリルフォルトへ連れて来ました。ヘリ

アスは角笛を吹きました。
「息子が帰ってきた」とオリアント王は妻と五人の子供たちに言いました。彼らは急いで迎えに行き，再会を喜び合いました。そしてベアトリスが尋ねました。
「息子よ，八年間もどこに行っていたのですか」
「それはいずれお話しします」
「そなたを案内した白鳥はどこだ？」と王が尋ねました。
「川にいます」
　その時，母が言いました。
「昨夜，白鳥が人間の姿に戻る夢を見ました。私たちは彼の鎖から作られた二つのカップを用意し，それで二つのゴブレットを作らねばなりません。それから教会の二つの祭壇にそのゴブレットを載せます。そしてその祭壇の間に寝台を置き，その上に白鳥を載せるのです。それから二人の信心深い司祭にミサをあげてもらい，そのゴブレットで清めてもらいます。そうすれば彼は人間の姿にもどるでしょう」(31-35 章)
　彼らは直ちに金細工の職人を呼びに遣り，職人は二つのカップを返しました。ヘリアスは白鳥を教会の十字架の前に連れて行くと，両親や兄弟や他の貴族たちの前で白鳥を寝台に載せました。そしてミサがあげられ，人々は膝をついて神に祈ります。司祭たちが主の体を聖化した時，白鳥は人間の姿に戻りました。ミサの後，神に感謝して鐘が鳴らされ，テ・デウム（賛美の歌）が歌われました。そしてその子供は洗礼を施され，エメリと命名されました。
　白鳥の騎士ヘリアスはしばらくリルフォルトに留まり，両親や六人の兄弟と共に過ごした後，自分を育ててくれた隠者を訪ねることにしました。が，隠者は亡くなっていました。そこでオリアント王はその場所に修道院を建てさせました。その時，ヘリアスは故国を離れた後，自分に起こったことをすべて話しました。ブイヨン公爵夫人の娘と結婚し，イダインという綺麗な娘ができたこと，などです。そして言いました。
「父上，母上，兄弟たち，そして友人たちよ，私は皆さんとお別れせねばなりません。自分の人生を改め，信仰生活に入るためです」
　彼らは反対することもできず，みな泣き始めました。ヘリアスは全員と口付けを交わすと，杖のみを手にし，隠者の家へ行きました。そしてそこへ他の信仰家をも受け入れ，ブイヨンの城に似た町を造りました。名もブイヨンとし，その町の定期市や縁日を定め，修道院を維持するため，通行等にかかる一切の関税を無料にしました。

　白鳥の騎士ヘリアスの娘イダインは十三歳になりました。ドイツ皇帝オットーは彼女をユスタシュという名のブイヨン伯爵に嫁がせました。ノイマーゲンの宮殿で祝宴が開かれ，大勢の貴族や騎士や乙女が参列しました。その夜，イダインはゴドフロアを懐妊しました。同じ夜，彼女は三人の子供と一緒に寝ている夢を見ました。最初の二人は自分の乳を飲ませ，すくすく育ち，後に王冠をかぶりましたが，三番目の子は乳母に育てられたため，王冠が壊れていました。その後，天使が現れ，言いました。
「そなたの三人の子供はエルサレムをサラセン人の手から解放するであろう。だから大切に育てなさい」
　数年後，イダインはボードワンとユスタシュを身ごもりました。その頃，精霊降臨日にブイヨンで有力な領主たちの会議があり，伯爵夫人もミサにあずかりました。その時，末っ子のユスタシュが泣き止まないので，見かねた乳母が自分のお乳を飲ませました。が，イダインはその乳母を叱りました。そしてその日は終日，食事もとらず，三人の子供たちの傍にいました。夕食後，ブイヨン伯爵が諸侯を子供たちの部屋へ案内しました。彼らはそこに伯爵夫人を見い出し，丁重に挨拶をしました。イダインも丁重に挨拶を返しましたが，横になったままでした。それで伯爵は怒り，後で彼女を咎めました。すると彼女は言いました。
「そんなに怒らないで下さい。世界中がこの三人の母親である私を褒め称えるでしょう」
「どうしてだ？」
「三人の息子たちは聖墳墓をサラセン人の手から解放することになるからです」
「私は信じるが，他人が聞いたら，気が触れたと思うだろう」
「いえ，天使が私に告げたのです」
　夫は「そうなりますように」と言っただけでした。

　イダインの母親（ブイヨン公爵夫人）は夫のヘリアスを捜すため各地に使者や従者を送りました。ポンセという騎士見習いはエルサレムまでやって来て，十五日間，聖地や近くの霊場を捜しました。ある教会でフランス人らしい僧院長を見かけ，どこから来たのか尋ねますと，彼は答えて言いました。
「ブイヨンに近いゴールの出身で，サントロンの僧院長だ。ジラルドという。君は？」
「私はブイヨンの騎士見習いです」
「それは奇遇だ。一緒に帰国しよう」
と言って，ポンセを自分の宿へ案内し，もてなしました。その頃，エルサレムにはトルコ，ペルシア，アンティオキア，ニケーア，ダマスカスなど，異教国の王侯貴族が集っていました。エルサレム王が王位を息子のコルヌメラントに譲るため，彼らを召集したのです。諸侯の同意のもと十

五歳の新王が即位し，盛大な戴冠式が執り行われました。即位後，新王はわざわざサントロンの僧院長と会い，ゴールの領主たちの動向について尋ねました。その時，僧院長は自分とポンセのために安全通行権をもらいました。そして王に別れを告げると，翌朝，故国に向けて旅立ちました。

海を越え，山を越え，二人は非常に困難な旅を続けました。が，途中で道を間違え，ブイヨンの城の近くに来てしまいました。

「ここは我々の国ですよ」とポンセが言いました。

「何か欠けてはいないか」

「でも，ブイヨン城にそっくりですよ」

二人は城の近くの村に泊まりました。そして教区司祭を呼んで確かめました。

「お二人がご覧になったお城はブイヨン・ル・レストール，つまり再現されたブイヨン城と呼ばれています。白鳥の騎士ヘリアスがノイマーゲンのブイヨンからリルフォルトへ戻って来て，あの城を造り，ブイヨンと名付けたのです」

「その騎士は亡くなったのですか」

「いいえ，最後に会って六日も経っていません。ただ，彼は神が示された数々の奇跡に感謝し，信仰家になったのです。今は自分の魂の救済のため，彼の父が建てた修道院で罪の償いをしておられます」

「それを聞いて助かりました」

「何故ですか」教区司祭は言いました。

「私は，実は，ヘリアス殿の奥方であるブイヨン公爵夫人に仕えています。その奥方から命ぜられ，ずっとヘリアス殿を捜していたのです」

翌朝，僧院長とポンセはその城へ行き，ミサから帰ってきたオリアント王と王妃と六人の子供たちに会いました。最後に人間の姿に戻ったエメリが彼らに近づき，誰何しました。

「ノイマーゲンのブイヨンから来ました」

「ここで何をしているのだ？」

「私はブイヨンから出て行った白鳥の騎士を捜してエルサレムまで行ってきたところです。ブイヨン公爵夫人に頼まれて」

「それは兄のヘリアスのことだ」エメリは笑いながら言いました。「そなたがこの国を去る前に会わせてやろう」

と言って両親と兄弟たちを呼びました。

「この二人の紳士から兄の奥方とその娘イダインのことが聞けますよ」

ポンセは夫に去られた公爵夫人の嘆き，イダインのブイヨン伯爵との結婚のことを話しました。それを聞いて，王と王妃は「彼らがここにいたらいいのに」と言い，僧院長とポンセを抱擁しました。それから二人を城の中に案内し，みなで歓待しました。翌朝，エメリは二人をヘリアスの修道院へ連れて行きました。兄は祭壇の前で跪いていました。

「エメリ，何か変わったことでもあったのか」

「この二人の紳士がブイヨン公爵夫人とイダインの知らせを持ってきました」

ヘリアスはポンセのことを覚えていたので，彼を抱擁して言いました。

「よく来てくれた。よかったら，私の家族のことを教えてくれ」

ポンセは公爵夫人から命ぜられ，ヘリアスを捜して数々の国を旅したことを告げた後，帰国されるおつもりは，と尋ねました。

「それはない。神のご意思によりこの信仰生活から離れるわけにはゆかぬ」

「分かりました。お会いできてよかったです。公爵夫人も殿のことを聞かれたら喜ばれるでしょう」

「妻と娘にくれぐれも宜しく伝えてくれ。娘がブイヨン伯爵と結婚したことをとても喜んでいたとな」

その時，ポンセは殿にお会いしたことを示す証拠を何か頂きたいと言いました。

「それではこの指輪を持って行くがよい。これは公爵夫人が私にくれたものだ」

ヘリアスはポンセと僧院長に沢山の贈物を与え，妻と娘にも貴重な品々をことづけました。(36-40 章)

キリストの昇天祭の日，ブイヨン伯爵と妻のイダインと母の公爵夫人は，他の大勢の貴族たちと共に食卓に着いていました。そこへポンセが沢山の荷物を積んだラバを引いて帰ってきました。すぐに公爵夫人が彼を抱擁して言いました。

「ご苦労さま。して，夫に会えましたか」

「はい，奥様。これがそのしるしです」と言って，ポンセは指輪を見せました。

公爵夫人は泣きながらその指輪に何度も口付けしました。

「本当に会えたのですね」

「はい，奥様。それに，奥様とイダイン様にと，殿と殿のご両親様から数々の贈物を頂きました。殿のお父上は豊かなリルフォルトの有力な領主で，名をオリアント様といい，お母上はベアトリス様とおっしゃいます。しかも，五人の兄弟はみな勇敢な騎士であり，妹さんも一人おられます。つまり，殿はれっきとした王族の一員でございますよ」

それを聞いて，公爵夫人とイダインと伯爵はたいそう喜

びました。続けてポンセはヘリアスが父の建てた修道院で信仰生活を送っていること，エルサレムからの帰路，サントロンの僧院長と共に見たことなどを話しました。その時，公爵夫人は夫が信仰の道に入ったことを理解し，直ちに自分の所持品を用意させました。そしてイダインと共に夫のいる修道院へ旅立つことにしました。二人は，すでに十代の若者に成長したゴドフロワとボードワンとユスタシュの三人の息子を伯爵に委ね，ブイヨンを出立しました。そして山や谷を幾つも越え，ようやくヘリアスの修道院までやって来ました。が，彼は重病にかかり寝台に横たわっていました。再会の喜びもひとしおでしたが，彼の姿を見て公爵夫人と娘は嘆き悲しみ，ヘリアスも涙を流しました。それから間もなくヘリアスは安らかに息を引き取りました。そしてイエス・キリストが彼の労苦に報いるため，天国の聖人たちの間に彼の場所を与えました。その後，悲しみのあまり公爵夫人も後を追うように亡くなりました。イダインとお供の人々の悲しみは見ていられないほどでした。修道院の僧たちがすべて集まり，二人を恭しく主祭壇の前の同じ墓に埋葬しました。イダインはその修道院に多大の寄進をした後，ブイヨンへの帰途につきました。

帰国すると，イダインは息子たちに賢明な教師をつけ，また自ら行儀作法や人生の誠実さを教えて言いました。
「何事においても神を褒め称えなさい。そなた達はこの上なく立派な家柄の出なのです。つまり，有力なオリアント王とベアトリス王妃の息子，あの白鳥の騎士の孫なのです。だから常に神を畏れ，敬いなさい。また，民には優しくし，決して虐げてはなりません。そして普遍的な信仰を守るため，進んで身を捧げなさい。自分の国を正しく守り，維持するのです。貧しい寡婦や孤児の権利を保護し，困っている者には分け与え，悲しんでいる者を慰め，神の恩寵に感謝しなさい。そなた達がそれを実行できれば，この世で成功することができ，最期は天国に行けるでしょう」
三人の子供たちは幼い頃いつも一緒にいて，母親のこの教えをよく思い出しました。

彼らは十四歳になると，弓や石弓を射たり，剣や円盾で闘ったり，走ったり，馬上槍試合をしたり，鉾槍を振り回したり，レスリングをしたりし始めました。また，神の信仰を守るため，甲冑を身につけ，馬を駆けさせ，立派な騎士になろうと努めました。かくして三人とも驚くほど逞しく成長し，同じ年頃の若者で彼らに敵う者はいませんでした。三人とも均斉のとれた体をし，賢く，礼儀正しく，教養がありました。そして進んで神に仕えたので，みなから愛され，諸侯からも気に入られました。長男のゴドフロワが十五歳になると，イダインは騎士の爵位を受けさせるため，彼をノイマーゲンの皇帝の許へ行く準備をさせました。
「そなたは騎士になれる歳になりました。これはその時のために私が手ずから作った礼服です。お供の従者や小姓にもそなたに相応しい制服を用意させます。だから，ノイマーゲンの皇帝に会いに行きなさい。皇帝はそなたのお祖父様とお祖母様のことだけでなく，そなたのこともよく覚えておられます。だから，そなたに名誉の剣を授け，騎士にして下さるでしょう。そなたの二人の弟も同行させます」
「母上，そのような名誉を手に入れて下さり感謝します。喜んで参上します」
ノイマーゲンに着くと，ゴドフロワは直ちに宮廷へ行き，皇帝に丁重に挨拶しました。オットー皇帝は喜んで彼らを迎え，上機嫌で言いました。
「よく参った。あの白鳥の騎士ヘリアスの孫だな。そなたの両親の結婚は私が取り持ったのだよ。喜んでそなたにナイト爵を与えよう」
「陛下，有難う存じます」
それから皇帝はブイヨンのゴドフロワのために盛大な祝宴を開きました。続いて，馬上槍試合や武芸競技大会が行われ，ゴドフロワは数々の勝利を収めました。
その後，ボードワンとユスタシュも騎士に叙せられました。それから彼らの父，ブイヨン伯爵が亡くなりました。ゴドフロワは領民の暮らしを向上させ，巧みに領国を治めたので，すべての人から愛されました。が，やがて神がエルサレムの国をゴドフロワの手に委ねる時が近づきました。彼の唱道によってキリスト教国の諸侯が結束し，海を渡り，イエス・キリストの信仰を異教徒から守ったのです。それはゴドフロワと弟たちの年代記や事蹟に記されてる通りです。彼らは神のご意思によりこの世で友人たちを昇進させ，彼らの肉体の死後は彼らを天国の永遠の命へと導くでしょう。父と子と精霊が我々をそこへ導き給わんことを。アーメン。

2．解　題

このロマンスとの出会いは，イギリス初の印刷業者 William Caxton の弟子 Wynkyn de Worde が雇っていた翻訳家 Robert Copland (c. 1470-1548) の仕事について調べていた時であった。『ヘリアス』は Copland がバッキンガム公爵エドワード――物語の主人公の直系の子孫――に勧められて翻訳し，de Worde が 1512 年に出版したものである。[1] この本には 45 枚もの木版画が印刷されているのが特徴的である。そして 1560 年頃，彼の息子の William Copland がそれを改訂し，再発行している。[2]

Robert Copland が翻訳に使ったのは恐らくジャン・ペ

ティ（Jehan Petit）によって1504年にパリで発行された『いとも高貴で命名高い美徳ある白鳥の騎士を先祖とするいとも勇猛で名高い君主ゴドフロワ・ド・ブイヨンおよび彼の勇敢・高潔な弟ボードワンとユスタシュの家系と事蹟』（“La généalogie avecques les gestes & nobles faictz d'armes du tres preux et renommé prince Godeffroy de Boulion; et de ses Chevalereux frères Baudouin et Eustace: yssvs & descendus de la très noble et illustre lignée du vertueux chevalier au Cyne”）であろう。[3] しかし，これの全訳ではなく，第一部のみ，すなわち，後に第一回十字軍の司令官，そして1099年にエルサレム王国の初代統治者となった下ローレーヌ大公，ゴドフロア・ド・ブイヨンのルーツに関する部分だけである。それによればゴドフロアは白鳥の騎士ヘリアスの孫ということになっているが，「物語は全く空想の産物である」。[4]

Caxtonにもゴドフロアに関する翻訳（*Godeffroy of Boloyne, or, the Siege and Conqueste of Jerusalem,* EETS ES 64, 1481）がある。しかし，これには第一部に当たる部分が無く，第一回十字軍の詳しい顛末と，それに続くエルサレム王国の建設に関する記述であり，白鳥の騎士の物語とはずいぶん趣を異にする。Caxtonは仏語（MS. 68 of the Bibliothèue Nationale, Paris）から翻訳しているが，原典はテュロスの大司教Williamがパレスティナで1163-83年に書いたラテン語の『第一回十字軍とエルサレム王国の歴史』である。彼は1184年に死去したので，Ernoul of Gibletが1228年までをフランス語で書き，さらに別人が1231年まで書き加えている。[5]

William of Tyreによるラテン語の原典は1225年までにはフランス語に翻訳されていたようだ。スペイン語には1295年頃翻訳されているが，その*La Gran Conquista de Ultra Mar*は2段組で659ページに及ぶ膨大なコレクションであり，『アンティオキアの歌』，『エルサレムの征服』，『白鳥の騎士』，『ベルタ』，『メネット』，『フロワールとブランシュフロール』などのロマンスも含まれている。これはフランス語からカスティリヤ語に翻訳されており，Caxtonが使ったフランス語版も*La Gran*と同じ版である（いずれも十字軍の歴史は1275年まで）。しかし，『アンティオキアの歌』と『エルサレムの征服』では史実が改変されており，『白鳥の騎士』は「空想にまかせて作られ」た冒険物語にすぎない。

この物語には幾つかのヴァージョンがある。インターネットで『白鳥の騎士』を検索すると，一番多くヒットするのはヘリアスではなく，パルジファルの息子ローエングリンの白鳥の騎士である。これはドイツが舞台であるが，人間が白鳥に変えられるところなど，物語はよく似ている（リヒャルト・ワーグナーもこれを主題にしてオペラを書いている）。[6] いずれの物語にも共通するのは，私の素性を尋ねてはならない，尋ねたらこの国から出て行く，と主人公が妻に言うところである。これは，バリング＝グールドによれば，聖杯を守る騎士団の掟と関係があるらしい。ただ，『ヘリアス』の方が複雑で，よりキリスト教的な感じがする。妻の許を離れ，故国に帰った主人公が両親や兄弟たちと再会した後，森に入って信仰生活を送るところ，そして後を追うように妻が亡くなるところは『ウォリックのガイ』を思い出させる。[7]

もっと似ているのは14世紀末頃の作品『メリュジーヌ』である。[8] これは実在のリュジニャン一族の物語であり，妖精のメリュジーヌが一族の始祖と位置づけられている。白鳥の騎士ヘリアスもブイヨン家の始祖という設定である。また，『メリュジーヌ』の場合も，毎週土曜日に私がどこに引き篭っているのか知ろうとしてはならない，という禁忌がある。そしていずれの物語でもその禁忌を破ったために配偶者を失うことになるのである。

ゴッドフロワ・ド・ブイヨン伯の居城であったブイヨン城は現在も存在する。ブイヨン観光局のウェブサイトによれば，それはフランス国境に近いベルギーのワロン地方（フランス語圏）にあり，ベルギーで最も古い城と言われる。城内をガイドと共に見学でき，頂上の塔からはブイヨンの町が一望できる。また，ブイヨンから程近いオービィ（Auby）の村には魔女伝説が残っているという。[9] なお，物語の中でSaincteronの大修道院長もポンセに「ブイヨンに近いゴールの出身」だと言っているが，これは7世紀にSaint Trond（サン・トロン）という聖人が修道院を設立して発展した町のことだと思われる。この町もベルギーにあり，現在はオランダ語でシント・トルィデン（Sint Truiden）と呼ばれている。[10]

註

1) 1512年のde Worde版（New York: The Grolier Club, 1901）はKessinger Publishingからon demandで入手できる。原本はBritish Library, C 40. m. 9である。*OED*もドゥ・ウォード版を利用している。その木版画はJean Petitの1504年の仏語版から写されたものらしい。キャクストンがJules Machaultのフランス語訳から重訳し，1484年に出版した『イソップ物語』には挿し絵がある。また，彼が1481年にフラマン語（中期オランダ語）から訳した『きつね物語』には挿し絵はないが，1498年の低地ドイツ語訳（リューベック版）の1522年の再販には木版画がある（木村建夫訳『きつね物語』，p. 188）。

2)　William J. Thoms, ed. *Early English Prose Romances.* vol. III, pp. 1-140.　これはトムスが唯一の印刷本である British Library, C 21. c .61 [= Garrick Collection] から編集したもので，Robert Copland の本文より標準化された綴りを多数，持っている。

3)　池上俊一監修　『ヨーロッパをさすらう異形の物語』上・下, 柏書房，2007.

4)　神沢栄三・高田勇共訳　『中世フランス文学』（文庫クセジュ），白水社，1984.

5)　Colvin, Mary Noyes. ed. *Godeffroy of Boloyne, or the siege and conqueste of Jerusalem by William Caxton.* The Early English Text Society (Extra series no. 64). New York: Kraus Reprint, 1975?. キャクストンは「ゴドフロワの時代のようにイェルサレムを奪還するために新たなる十字軍派遣の機運を高めよう」としたのである（『きつね物語』，p. 306）。

6)　ゲルハルト・アイク編，鈴木武樹訳『中世騎士物語』（白水社，1996）に「白鳥の騎士ローエングリン」が入っている。

7)　*Guy of Warwick* の最も古い版は 13 世紀初頭のアングロ・ノルマン語のロマンスであり，英語版はその翻訳（Auchinleck 写本の題は *Sir Gij of Warwicke*）。12 世紀末にリュジニャン家にもギイという人物が実在した。森本英夫・傳田久仁子共訳『妖精メリュジーヌ伝説』（インタープレイ，pp. 259-261）によれば，この人は当時のエルサレム王ボードゥワン四世の妹と結婚し，エルサレムの王冠をいただいた。

8)　『メリュジーヌ』には二種類のテクストがある。一つは 1393 年にベリー公ジャンの秘書ジャン・ダラスが散文で書き，ベリー公とその妹マリに捧げたもの。もう一つは，1401 年以降に，ポワトゥのクードレットがパルトゥネの領主ギョーム・ラルシュベックに命じられて韻文で書いた『メリュジーヌ，或はリュジニャン一族の物語』である。いずれにも中世英語訳がある。散文は *Melusine* (EETS, Extra Series, 68) に，韻文は *The Romans of Partenay, or of Lusignen* (EETS, Original Series, 22) にある。

9)　この伝説というのは，Tourism Office BERTRIX の Delphine Nannan さんの私信によれば，以下のようなもので，ヘリアスの物語とは無関係の由である。

　昔，オービィに Colas Chacha と呼ばれる羊飼いがいました。彼はいつも首に大きなロザリオをかけていたので，とても敬虔な男と思われていました。しかし，それは人を欺くためで，本当は魔法使いの王でした。彼は夜, 魔女たちに安息日の熱狂的な踊りをさせたり，近くの峰の岩から後ろ向きに飛ぶ術を教えたりしていました。ある日，村の女が彼のロザリオと質素な身なりを見て褒めました。すると彼は「お前はまだ私を知らないのだ」と言いました。それから数週間後，その村を疫病が襲い，多くの牛が死にました。村人たちは魔女の仕業だと考え，一人の若い女を捕え，拷問にかけました。が，その娘はチャチャとその邪悪な仲間たちを告発しました。そのため，羊飼いは尋問されました。そしてすべてを白状し，ブイヨンにある橋の真ん中で火あぶりの刑に処されました。

10)　ブリュッセルに住む知人の Stefanie Montenegro さんに *Saincteron* の大修道院について調べてもらったところ，*Latin Greece, the Hospitallers, and the Crusades, 1291-1440* という本に “In May 1386 the Hospitallers' treasurer at Avignon paid eight francs pour envoier en brabant par devers frere henri de saincteron et autres” [The Hospitaller's treasurer paid eight francs to send Brother Henry of Saincteron and others to Brabant.]（p. 89）という記述があるので，その修道院が存在したことは確かであるが，場所についてはアルデンヌ地方（フランス北東部とベルギー南東部）のどこか，従って Sint-Truiden はその地方にはないので違うだろうという返事であった。インターネットの Catholic Online というサイト（http://www.catholic.org/saints/）によれば St. Trudo（= St. Trond）の建てた修道院は Louvain の近くにあったとある。しかし，その場所もベルギーの中央部に位置し，「ブイヨンの近く」ではない。その後，再びステファニーからメールが来て，*Table des noms propres qui figurent dans les chansons de gest imprimées antérieures au règne de Charles V* という本に　Saint Tron は『白鳥の騎士』に Sainteron として現れるという記述があると教えられた。どうやら，現在の Sint Truiden と考えてよさそうである。そうだとすると，ロマンスの作者によって位置が変えられたことになる。